

— 水俣病、イタイタイ病、四日市ぜんそく、ナイロンザイル事件 =不条理との闘い—

OWCC 中川和道 20230216

来るはずの年賀状が来ない。不安だ。年賀状の時期が過ぎて寒中見舞いの時期になり、不安は胸騒ぎへと高まった。1月30日、ついに一報が。石原國利さんが29日他界されたとの一報が九州「山の図書館」の重藤秀世さんから届いた。石原さんはナイロンザイル事件(図1)で墜死した若山五郎を確保しておられた、そのご当人である。登山史の生き証人がまたひとり、天に召された。享年

92才。ナイロンザイル事件の取材などで何度もお会いしてきたので中川の動揺と傷心は大きかった。心に大きな空洞を抱え、あたふたと九州へご葬儀に向かった。

重い話だからだろうか、大阪労山ではナイロンザイル事件への関心は低く、中川が話題提供の提案をしたが、大阪では取りあげられて来なかった。登山者が不条理な企業や学者と闘って勝利を収めたこの事件は登山界の発展や労山の歴史を語るうえで画期的に重要だ。これからは現れ続けるであろう欠陥装備への対処法の教科書でもある。ナイロンザイル事件は別の姿でこれからも起きる。大阪労山の仲間のご関心が、今一度、湧き起こって下されば幸いである。

概要を書く。1955年1月2日岩稜会パーティーが前穂高岳東壁を登攀中に約50cm墜落した(図1)ところ、ナイロン製の8mmクライミングロープ(東京製綱社製 引張強度約800kgf)があっけなく切断。確保者石原國利氏は何のショックも感じないまま、リードクライマー若山五郎氏は墜死した。その年末年始には、明神岳東壁で東雲山溪会パーティーが、前穂高岳で大阪市立大学山岳部パーティー(中川は大阪労山Fさんから直にお話を伺った)が、同じくロープ切断事故に見舞われた。3件の同一地域、同時多発事故であった。関係者は一同、ナイロンロープの強度に疑問をもった。なお、図1でロープを岩角にかけて墜落距離を短くすべしとの技法は、岩角に極めて強い当時の麻ロープでは必須の登攀技術であり、みんながこうしていたことを強調しておく。岩稜会の会長は石岡繁雄氏、墜死した若山五郎氏は石岡繁雄氏の実弟である。

ここまでは「事故」であった。ところが、ロープメーカー東京製綱が1955年4月29日に蒲郡市で行った公開実験(指導:阪大-篠田軍治教授)では岩角に2mmの丸みがつけられたのでロープは切れなかったのに、丸みのない岩角で十分な強度があることが証明されたとの虚偽の結論が発表された。人間の故意が持ち込まれたその瞬間、この事案は「事故」ではなく「事件」になった。

岩稜会は1956年6月篠田教授を告訴。この事件は作家-井上靖の心を強く揺さぶり井上は事件係争中に朝日新聞小説「氷壁」を20回にわたり連載。ナイロンザイル事件は社会現象となった。

事態を深刻にしたのは、篠田教授が日本山岳会の大物であったので日本山岳会がナイロンザイルは強いとの立場を「山日記」で表明したため、登山界が一枚岩ではなくなったことだ。岩稜会は企業と日本山岳会の両者との闘いを強いられる苦しい展開となった。強いとされたナイロンロープはその後も切断し続けた(石岡繁雄氏集計:1972年までに19件、80年までで累計21件[2])。これを受けて、事件は、当時の他の公害事件(水俣

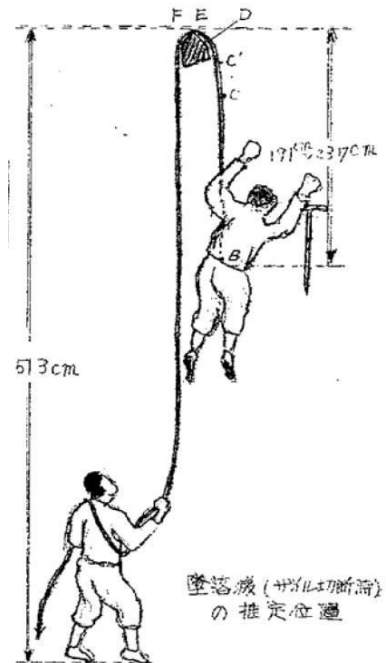


図1.前穂高岳東壁におけるナイロンザイル切断の状況 (文献[1]p.34)。

病、イタイタイ病、四日市ぜんそく)とは異なる方向へと歩み始めた。すなわち、国が異なる方向に動いたのである。通産省(当時)は消費生活用製品安全法(ヘルメットの基準など)を 1973 年 6 月に制定し、その特定用品に登山ロープを加えていく方向を定めた。これを受けて 1973 年に登山用ザイル安全基準調査委員会が発足した。注目すべきは、この委員会に参加したのが石岡繁雄氏であったことだ。この委員会の審議を経て登山用ロープの安全基準が制定されたのは 1975 年 6 月 5 日。このとき世界で初めて岩角での切断テストを取り入れた登山用ロープのテスト方法と合格基準が設けられた。基準に合格したことを示す通称「S マーク」をロープ 1 本 1 本に付する。さらに「エッジでは切れやすいので注意すること」との警告も 1 本 1 本に付さないと販売できないこととなったのである。日本山岳会は、ナイロンザイルは強いとの山日記の記述を 1976 年に修正した。

こうして石岡繁雄氏を中心とする岩稜会の粘り強い活動は、現在の製造物責任法(PL 法、1994 交付)を先取りする先駆的な闘いとして、1975 年 6 月 5 日の消費生活用製品安全法における登山用ロープの安全基準制定に結実した。書くべきことがあと 2 項目あるが、別の機会にゆずる。

石岡繁雄氏のご息女石岡あづみさんを中心とした「石岡繁雄の志を伝える会」の文字どおり並々ならぬ精力的な活動の成果がホームページ(文献[1]後半の URL)にまとめられている。この機に、ぜひご覧いただきたいと願う。さらに最近、多くの資料が名古屋大学に寄贈・寄託された。登山界の宝物として、みんなで大切に守っていききたいと中川は強く願っている。

大阪労山に来て間もない 1990 年頃、中川は、石岡先生の取材や自動制動確保器開発[2]に、久保利永子さんや中島史博さんとともに、足しげく通い詰めた。あの日々の思い出は、談話の機会を設けていただければいくらでも話したいと思う。ひとつだけ書く。「中川さん、国が味方についてくれたんだ。あれは嬉しかった・・・」と、あの童顔をほころばせて語られた。忘れられない。

表題の石原國利さんとは、九州や神戸で何度もお会いした。石原さんのご胸中は、文献[3]に詳しく、これにほぼ尽きると中川は思っている。ぜひ、お読みいただきたい。灘の酒蔵にご招待した時に奥様といらっしやった思い出も深く、きりが無い。機会があれば、懐かしくお話ししたい。

文献

[1]石岡繁雄の志を伝える会『ナイロン・ザイル事件(活字版)岩稜会発行 1956 年(昭和 31 年)』。

<https://www.shigeoishioka.com/2017.11.2-hp.pdf> <https://www.shigeoishioka.com> も参照を。

[2]石岡繁雄、中川和道、久保利永子「ナイロンザイル切断事件から半世紀--21 世紀の登山者、社会が引き継ぐべき教訓を考える」、『岳人』No. 669、2003 年 3 月号、pp. 75-81。

[3]石原國利・近藤信行：対談「井上靖『氷壁』とその時代」、日本山岳会緑爽会報 No. 104、2012 年 1 月 25 日。

補注 1:「ナイロンザイル事件は解決したのでロープは切れなくなった」との重大な誤解があると指摘を受けた。容易に切れるので、注意が必要である。また、「ナイロンザイル事件は終わった」というのも誤解である。欠陥をもつ装備や素材は次々と発売され続け、別の形のナイロンザイル事件がまた来ると予測される。それにどう備えて命を守るべきかをナイロンザイル事件は教えている。事件はまだ終わらない。事件はまた来る。

補注 2：石岡繁雄氏が定めた岩角での切断テストを取り入れた登山用ロープのテスト方法と合格基準はピット・シューベルト氏来日(2000 年、労山招へい)のさい、東京・大阪での技術交流や討論を経て、ピット氏により、UIAA のテスト基準として採用された。ナイロンザイル事件が生んだロープ安全基準はかくして海を渡り、UIAA 世界基準となったのである。約 3 年間で終わりはしたものの、登山界へのインパクトは大きかったと中川は信じている。この報告は近々行う予定。